神山町における小学生の自己意識形成要因と地域・社会に関する調査研究

教育班（徳島教育社会学会）
伴　恒信[1)]・清水　俊平[1)]・斎藤　仁美[1)]
松原亜希子[1)]・国見　明子[1)]・松浦　康郎[1)]
鈴木　武[1)]・森田　充彦[1)]・岩岸　徹[1)]
西川　彩子[1)]・川又　里美[1)]・瀬尾　真未[1)]
劉　銀永[1)]

１．調査・研究の目的

平成８年の中央教育審議会（以下「中教審」と略す）答申「21世紀を展望したわが国の教育の在り方」において、「生きる力」をはぐくむことが提案されて以来、それを今後の教育の中心概念として数多くの答申がなされている。平成10年の中教審答申「新しい時代を拓く心を育てるために」においても、新しい時代をひらく積極的な心を育てようという提言がなされ、「生きる力」を身に着ける取組を社会全体で進めていくことが大切であると述べられている(1)。

社会全体の中でも中心となるのが、家庭・学校・地域であろう。主にこれらの場において、子どもたちは教育され、感化され、社会の一員としての自覚と行動様式を身に着け、社会化されていくのである。

近年、子どもたちの個人生活志向が強くなり、人とのかかわりが希薄化しているといわれる。そのような複雑な社会状況のもと、集団や社会とのかかわりのなかで子どもたちは自らをどのような存在であると考えているのであろうか。また、自らを取り巻く社会とどのようにかかわっているのであろうか。

子どもが社会的な人間となっていくためには、自己についての認識が深まることが必要である。自己の形成と社会化の過程において、子どもが積極的な自己意識を持ち、肯定的に他者を見るようになることは、将来の社会生活を幸せに送っていくことができるかどうかということと、深くかかわる重要なことでもあろう。

様々な教育問題が報道される今日、神山町民にとっても教育は大きな関心事の一つであろう。また、神山町の子どもたちについても、テレビを含めたマスメディアの影響は大きいに違いない。そこで、本調査では、質問紙調査を通して、神山町の子どもたちの日常生活や学校生活・家庭生活などの実態を把握することを第１の目的とした。

1）鳴門教育大学

また、本調査では、子どもの自己意識を自分自身に対する認識と学校や家庭などの周囲の他者とのかかわりからとらえていくこととした。これをもとに、自己意識と人間関係・行動との関連をとらえ、どのような自己意識をもった子どもがどのような人間関係をもち、どのような行動をしているのかについて考察することを第２の目的とした。

２．調査方法の概略

平成11年７月上旬に、神山町立上分小・下分小・阿川小・鬼籠野小・広野小・神領小のそれぞれ４・５・６年生を対象として質問紙調査を行った。有効回答の内訳は、それぞれ上分小９人、下分小15人、阿川小21人、鬼籠野小23人、広野小62人、神領小68人の計198人である。

質問紙は「日常生活」、「学校生活」、「友人関係」、「家族関係」、「地域社会」についてと、自分はどのような子どもであるかという「自己意識」の各領域で構成し、回答方法は、４段階評定法（よくある・わりとある・あまりない・まったくない　等）を用いた。

３．調査・研究の結果と考察

１）神山町の子どもたちの生活実態

神山町の子どもたちの日常生活・学校生活・友人関係・家族関係・地域社会について、調べた結果を単純集計して考察を加える。

(1) 日常生活（基本的生活習慣）

「最近、朝ご飯を食べないで登校する子が多い」と言われるが、神山町の子どもたちは、どうなのであろうか。また、テレビの見過ぎも指摘されることが多い。そこで、神山町の子どもたちが、家庭でどのような過ごし方をしているのかを、宿題・次の日の準備・おやつ・朝ご飯・テレビについて質問してみた。結果は以下の通りである。

これらの基本的生活習慣については（図１）、「宿題をきちんとする」と「学校の準備は前の日にしている」に「とてもそう」、「わりとそう」と回答した子どもが半数以上を占めているのが特徴的であり、家庭内での生活習慣の確立がうかがえる。また、「おやつを食べ過ぎてごはんが食べられないときがある」に「あまりそうでない」と「まっ

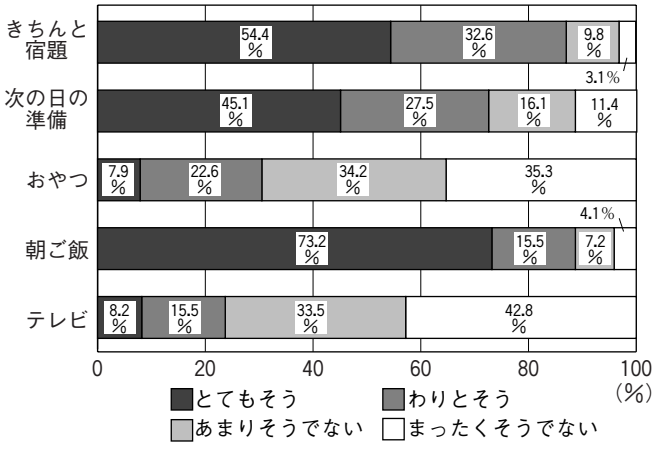

図１　基本的生活習慣

たくそうでない」と回答した子どもが半数以上で、「朝ご飯は毎日食べる」に「とてもそう」と回答した子どもが７割以上という結果からみてみても、食生活習慣もほぼ確立していることが分かる。

一方、「テレビは時間を決めてみている」に「まったくそうでない」と「あまりそうでない」と回答した子どもが７割以上という点から、メディアの影響力の強さを感じるとともに、余暇はテレビを見て過ごすという現代の子ども像がうかがえるように思われる。

(2) 学校生活

最近、学級崩壊などの学校をめぐる問題がマスコミで数多く報道され、保護者は不安をつのらせている。神山町の子どもたちはどうなのか。そこで、学校生活について、「授業中の気分」と「勉強・友だち関係を築くこと・係の仕事・スポーツをどれくらい学校生活の目標にしているか」について質問してみた。集計結果は以下の通りである。

学校生活においては、授業中落ち着かなかったり、いらいらしたり、という子どもは少なく、クラスの雰囲気がよく、集中して学習していることがうかがえた（図２）。

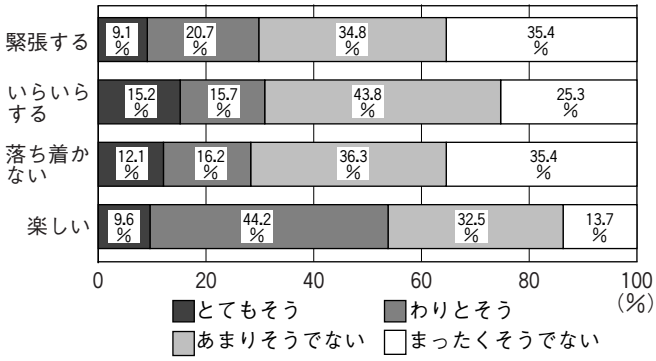

図２　授業中の様子について

学校生活で目標としていることについて見てみると、「しっかりと勉強すること」、「友だちをつくること」、「助け合って、係の仕事をすること」、「クラブ活動やスポーツをがんばること」というそれぞれの項目において、がんばることを目標としているかという質問に対して、すべての項目で「とてもそう」「わりとそう」と回答した割合が高く、「そう思わない」と回答した子どもは少数であった（図３）。これらの目標の中でも、神山町の子どもたちは、「クラブ活動やスポーツをがんばること」に「とてもそう」と回答した割合が最も高く、積極的に運動しようとする気持ちが強いことがうかがえる。また、学習への意欲もあり、友人関係を確立しながら、自分

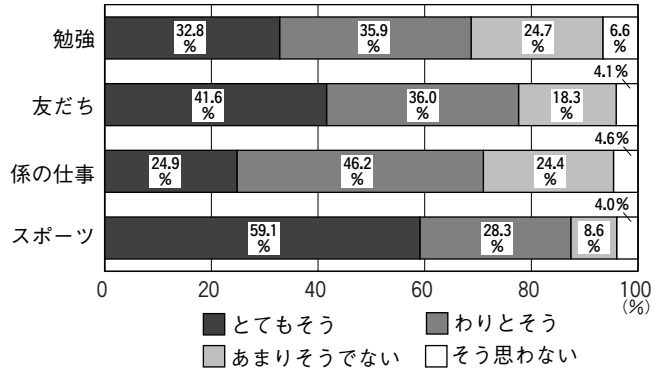

図３　学校生活での目標

の仕事・役割をしっかり果たそうとする傾向にあることが分かる。

小学校４～６年生というこの時期は、責任感や役割意識が確立してきつつある重要な時期でもあるが、神山町の子どもたちは、その意識が強い子どもが多いといえるであろう。

(3) 友人関係

都市部においては人間関係の希薄化が問題視されているが、神山町の子どもたちはどうであろうか。友人関係について、「何でも話せる友だちの数」と「友だちへの思い」を質問した結果は、以下の通りである。

この結果から、「何でも話せる友だちの人数」は１人が最も多く、少人数ながらも密度の濃い人間関係を築いていることが予想される（図４）。一方、０人と答えた子どもが13.3%いるということは、自分をさらけだすことに抵抗がある子どももいるため、一概に友だちがいないとは言えないが、いっそう良好な友人関係を築いていけるよう願うところである。

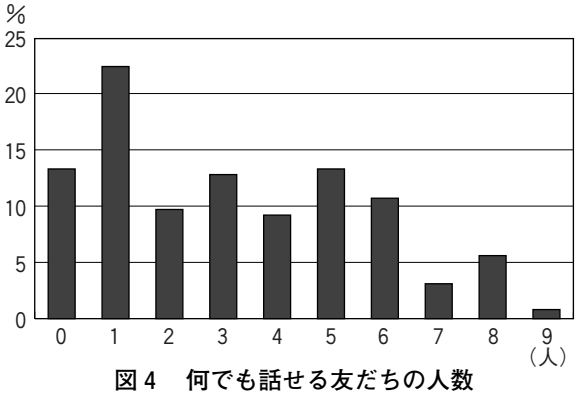

図４　何でも話せる友だちの人数

上の質問に関連して、「友だちへの思い」を質問してみた。「休み時間は、友だちといるより一人でいたい」「クラスの友だちが困っていたら、助けてあげようと思う」「仲の良い友だちのなやみを聞いたり相談にのってあげることが好きだ」という質問に対して、「とてもそう思う」「わりとそう思う」「あまりそう思わない」「まったく思わない」のいずれかの回答を求めた（図５）。その結果、「クラスの友だちが困っていたら、助けてあげようと思う」という質問に対して、「とてもそう思う」「わりとそう思う」と回答した率が高く、神山町の子どもの他人への思いやり意識の強さがうかがえた。一方、「休み時間は、友だちといるより一人でいたい」という質問に対して「とてもそう思う」「わりとそう思う」と回答した子どもが約10%いることから、友人関係発展途上にあるそれらの子どもたちを温かく見守ることが必要となるであろう。

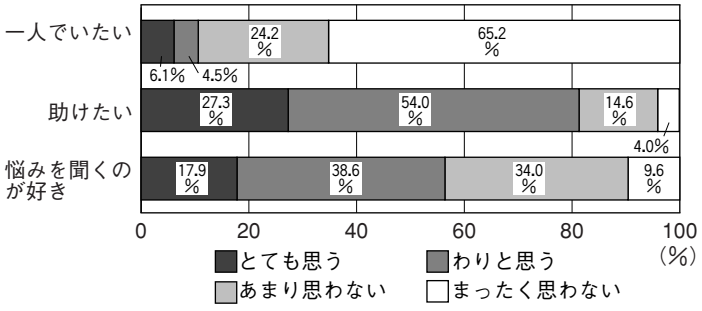

図５　友だちへのおもい

(4) 家族関係

子どもが健全に育つためには家族関係が重要であるといわれるが、神山町の子どもたち

の家族はどのような状況にあるのであろうか。それについて調査するため、「自分の悩みを話す」「自分のことを理解して話をしてくれる」「一緒に買い物に行く」「一緒にテレビを見る」「休みの日には一緒に出かける」という質問に対して「よくある」「わりとある」「あまりない」「まったくない」のいずれかを回答するよう求めたところ、以下の結果が得られた。

「一緒にテレビを見る」という質問に対して「とてもそう」「わりとそう」と回答した子どもが８割を超え、「一緒に買い物にいく」という質問に対して「とてもそう」「わりとそう」と回答した子どもも８割程度おり（図６）、家庭内でのコミュニケーションの良さや家族の親密度を表す結果となっている。

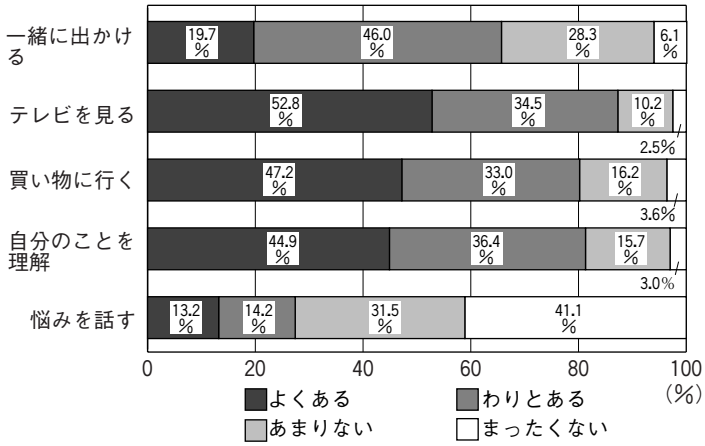

図６　家族との関係

また、「自分のことを理解して話をしてくれる」という質問に対して「よくある」と回答した子どもが半数近くをしめ、「わりとある」を含めると８割を超えることから、両親から認められているという思いが強く、温かい関係が築かれている家庭が多いことがうかがえる。

(5) 地域社会

地域社会の教育力が低下して、子どもが変わってきたという意見も少なくないが、神山町の場合はどうであろうか。子どもたちの地域社会についての意識について調査するため、「地域の掃除」「あいさつ」「お祭り」に対する気持ちや参加態度について質問した。その結果は、以下の通りである。

「地域の掃除」については「進んで手伝う」と回答した子どもが40%を超え、「何もしない」の約12%を大きく上回っている（図７）。また、「あいさつ」を「自分からする」と回答した子どもが約85%おり（図８）、地域に温かい人間関係が築かれていることを察することができる。これらから、都市部のように「隣は何をする人ぞ」とい

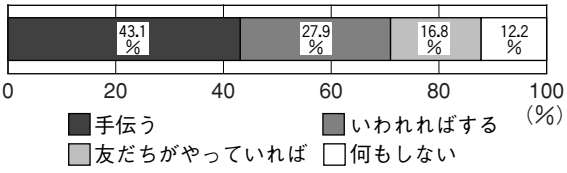

図７　地域の掃除について

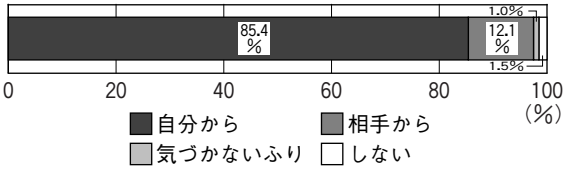

図８　あいさつについて

う希薄な関係ではないことがわかる。

さらに「お祭り」への参加態度についても、「進んで参加する」と回答した子どもが50%おり、「誰かと一緒なら参加する」と合わせると85%を超えることから（図９）、地域の教育力の低下が問題視される今日において、神山町の地域の教育力の高さがうかがえた。

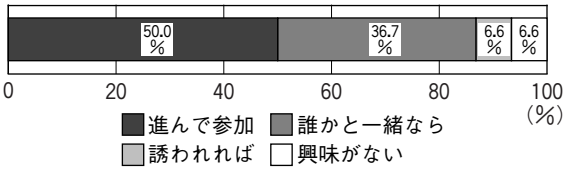

図９　お祭りに参加するか

２）自己意識について

神山町の子どもたちは、自分自身についてどのように考えているのであろうか。子どもが積極的な自己意識を持ち、肯定的に他者を見るようになることは、社会生活を幸せに送るために重要なことである。

神山町の子どもたちの「自己意識」について、自分自身のことや自分を取り巻く環境から判断するため、表１の質問によって調査したところ、図10の結果が得られた。

これを見ると、「自分をときどきひとりぼっちだと感じる（質問項目１）」に対して「よ

表１　質問事項

1	自分はときどきひとりぼっちだと感じる
2	みんなといっしょにいてもつまらない
3	なんとなくみんなからきらわれているような気がする
4	みんな自分より、よくできるように思う
5	誰かが自分の悪口をいっているように思う
6	みんなが自分のことをどう思っているのか気になる
7	わたしの周りはやさしい人がおおい
8	お父さんはわたしのことをよくわかってくれている
9	お母さんはわたしのことをよく分かってくれている
10	先生はわたしのことをよく分かってくれている
11	わたしの家族は仲がいい

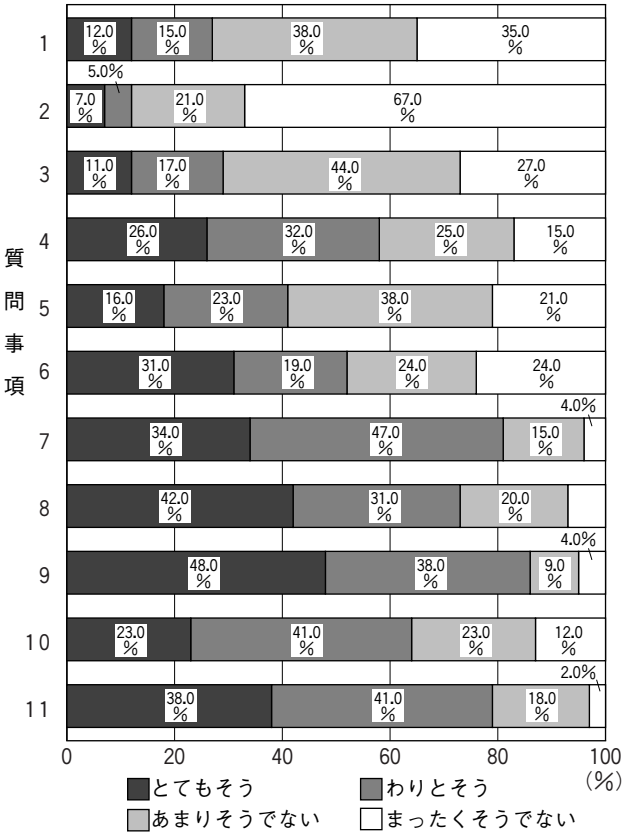

図10　自己意識

くある」「わりとある」と答えた子どもが、ともに40%弱を占めていた。しかし、「みんなといっしょにいてもつまらない（質問項目２）」には、「あまりない」と「まったくない」と答えた子どもが約90%で、友だちと過ごす時間は楽しんでいることがわかる。

その他の顕著な表れとしては、「わたしの周りはやさしい人がおおい（質問項目７）」について肯定的に答えた子どもが80%を超え、「お母さんはわたしのことをよくわかってくれている（質問項目９）」についても肯定的にとらえた子どもが90%に近かった。また、「お父さんはわたしのことをよくわかってくれている（質問項目８）」と「先生はわたしのことをよくわかってくれている（質問項目10）」についても、肯定的に答えた子どもが多く、自分を取り巻く大人たちが自分に対して優しく接し、理解してくれていることを認識していると考えられる。

３）因子分析結果

本調査では、先に述べた通り、子どもの自己意識を自分自身に対する認識と学校や家庭などの周囲の他者との関わりからとらえていくこととした。これをもとに、自己意識と人間関係・行動との関連をとらえ、どのような自己意識をもった子どもがどのような人間関係をもち、どのような行動をしているのかを考察する。

そのための手段として、子どもたちの自己意識の傾向をつかむために、SPSS統計パッケージを利用して因子分析を行った（表２）。なお、因子分析抽出法及び回転法は、それぞれ主因子法、バリマックス法を用いた。次に、因子を構成する項目の特徴をとらえ、因子の指標化を試みた。さらに、各指標ごとに「よくある」に３点、「わりとある」に２点、「あまりない」に１点、「まったくない」に０点を与え、各指標全体を得点化した。

表２　自己概念についての因子分析結果

項　　目	因子1	因子2	因子3
自分はときどきひとりぼっちだと感じる	−.03797	.73586	−.12368
みんなといっしょにいてもつまらない	−.12768	.39613	−.47750
なんとなく、みんなからきらわれているような気がする	.01006	.78013	−.13860
みんな自分より、よくできるように思う	−.15483	.38272	.57323
誰かが自分の悪口を言っているように思う	−.09232	.73847	−.01729
みんなが自分のことをどう思っているのか気になる	−.01543	.65935	.22902
わたしの周りはやさしい人が多い	.25265	−.12921	.74330
お父さんはわたしのことをよくわかってくれている	.83570	.02362	−.01190
お母さんはわたしのことをよくわかってくれている	.83659	−.11282	.03280
先生はわたしのことをよくわかってくれている	.60547	.04935	.18308
わたしの家族はなかがいい	.79444	−.16001	.03856
固有値　1.0		寄与率　57.5	

因子分析の結果は、以下の通りである。

因子１は、「お父さんはわたしのことをよくわかってくれている」、「お母さんはわたしのことをよくわかってくれている」、「先生はよくわたしのことをわかってくれている」、「わたしの家族はなかがいい」の四つの質問項目に共通する因子である。これは、父・

母・先生・家族といった周囲の大人たちとの関係が良好であるという自己意識である。この自己意識については、他の環境要因などとの関連を考察するため、『大人関係良好指標』と名前をつけることにする。

因子２は、「自分はときどきひとりぼっちだと感じる」、「なんとなくみんなからきらわれているような気がする」、「誰かが自分の悪口を言っているように思う」、「みんなが自分のことをどう思っているのか気になる」という、友だちとの交友関係で不安を感じたり神経質になったりする自己意識である。因子２に、『ナーバス指標』と名前をつけておく。

因子３は、「みんな自分より、よくできるようにおもう」、「わたしの周りはやさしい人がおおい」といった、他者を肯定的に見ようとする自己意識である。因子３を『他人肯定指標』と名付けておく。

４）クロス集計結果

自己意識に影響を及ぼす環境要因には、どのようなものがあるのだろうか。それを明らかにするため、先の因子分析結果と家庭・交友関係・行動などとの関連をクロス集計を通して考察する。

なお、本集計で利用する「家族良好コミュニケーション」は家族関係に関する回答を得点化して合計したものである。また、「家庭内関心・期待度」は、家庭についての関心や期待にかかわる回答を、「家庭内協調行動」は家族関係に関する回答を、「自立的行為」は、日常生活における基本的生活習慣に関わる回答を、「孤立的交友関係」及び「社交的交友関係」・「積極的・主体的集団行動」・「思いやり的友だち関係」は、友人関係に関わる回答を得点化し合計したものである。

また、それぞれ合計得点が高い集団を高群、低い集団を低群とし、どちらでもないものを中群とした。

(1) 因子１とそれに関連する影響要因のクロス集計結果

因子１は、『大人関係良好指標』と名付けたものであるが、この因子について高群の子ども（大人との関係をうまく築いている子）は、家庭環境に恵まれているであろうという仮説を持ってクロス集計を実施してみると、以下のような結果が得られた。

図11では、因子１の高群の子ども（大人との関係をうまく築いている子）は、家族とのコミュニケーションが十分にとれていることがわかる。また、図12のグラフでは、因子１の低群の子ども（大人との関係をうまく築いていない

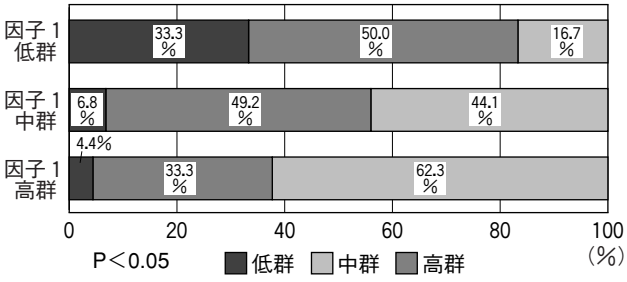

図11　因子１と家族良好コミュニケーション

子）は、家庭についての関心が低く、期待度も低いということがわかる。さらに、図13では、因子１高群の子ども（大人との関係をうまく築いている子）は、家庭内協調的行動（家族で一緒に食事をしたり、出かけたり、遊んだりする行動）が多いことがわかる。

やはり、親子で一緒に活動したり楽しんだりすることで、子どもたちは大人との関係をうまく築いていく力を身につけていくと考えられる。

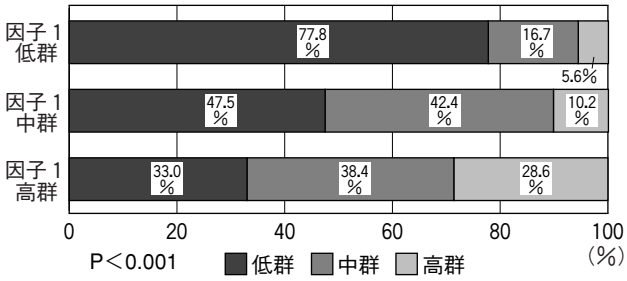

図12　因子１と家族内関心・期待度

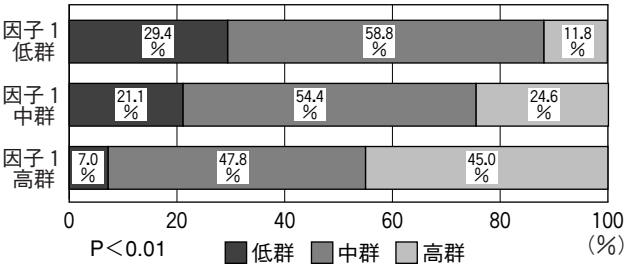

図13　因子１と家族内協調的行動

(2) 因子２とそれに関連する影響要因のクロス集計結果

因子２は『ナーバス指標』と名付けたものである。他人との関係に不安を抱きやすい子どもたちにはどのような傾向があるのであろうか。また、逆に不安を抱きにくい子どもにはどのような傾向があるのであろうか。クロス集計を通して考察してみる。

図14では、『ナーバス指標』低群の子（友人関係で不安を抱きにくい子）は、自立的行為ができる子（自分のことは自分でしようとする子）がある程度多いが、必ずしもそうではなく、自分のことは自分でできる子どもにも友人関係に不安を抱きやすい子がいることがわかる。

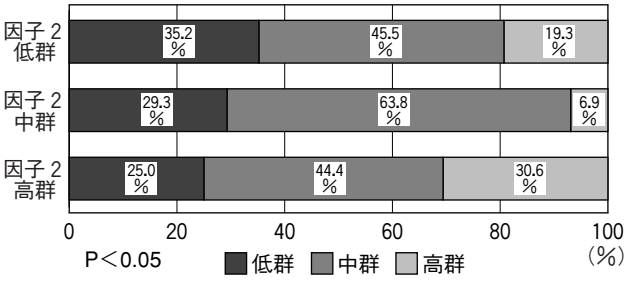

図14　因子２と自立的行為

図15では、『ナーバス指標』低群の子（友人関係で不安を抱きにくい子）は孤立的交友関係（自分はひとりぼっちだと感じること）が少ないことがわかる。また、図16では、『ナーバス指標』低群の

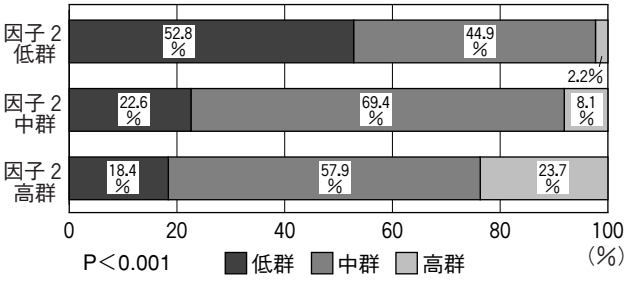

図15　因子２と孤立的交友関係

子（友人関係で不安を抱きにくい子）は、やはり、社交的交友関係が高群の子が多いことがわかる。つまり、友人関係で不安を抱きにくい子は、ひとりぼっちだと感じることが少なく、友だちと社交的な交友関係を築いているということである。

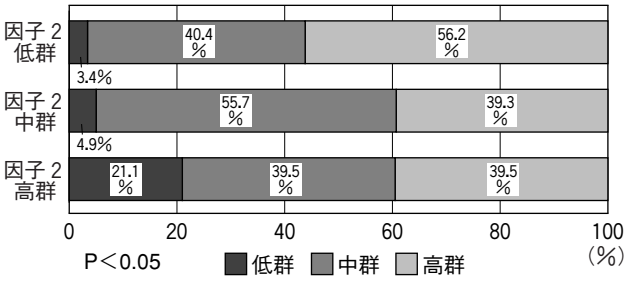

図16　因子２と社交的交友関係

(3) 因子３とそれに関連する影響要因のクロス集計結果

因子３は『他人肯定指標』であり、周りの人のことを優しい、よくできるというように肯定的にとらえる傾向の指標である。この指標について、積極的・主体的集団行動（集団の中で積極的に行動しようとするかどうか）とクロス集計してみると、顕著な表れは見られなかった（図17）。

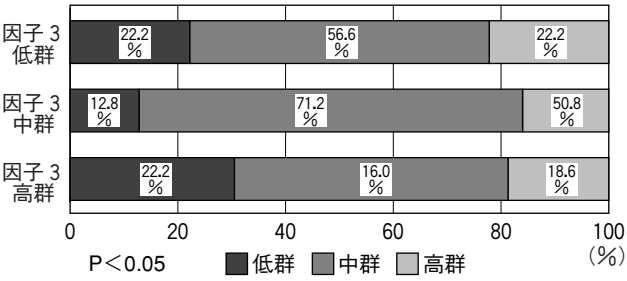

図17　因子３と積極的・主体的集団行動

この因子と思いやり的友だち関係（友だちに対して思いやりを持って接することがきるかどうか）の関係を見ると、『他人肯定指標』高群の子（他人を肯定的にとらえる子）は、友だちに対しても思いやりを持って接することができていることが顕著である（図18）。

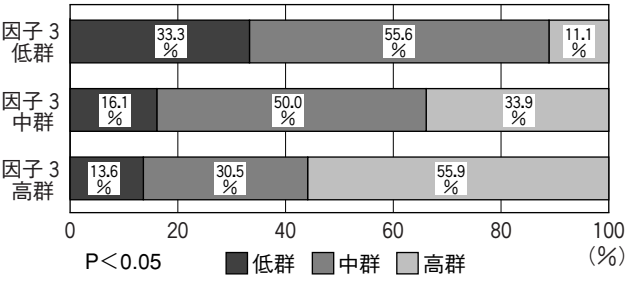

図18　因子３と思いやり的友だち関係

４．まとめと今後の課題

本研究では質問紙調査を通して神山町の子どもの実態を把握し、自己意識と人間関係や行動との関連を考察した。

小学生の自己意識については、やはり家庭においても学校においても、共に活動すること（共生）を通してよりよい人間関係やコミュニケーションを築いていくことが、積極的な自己意識の確立、さらには高い自尊心にもつながると考えられる。

子どもの日常生活については、テレビを長時間見る傾向があるものの基本的な生活習慣が身に着いている子どもが多いのは、大家族ではぐくまれている子どもが多く、家庭の教育力が行き届いているためと考えられる。また、学校生活では、勉強・友人関係・係の仕事・スポーツをがんばることを目標としている子どもが多かった。本町の子どもには、都市部にみられる学級崩壊などの問題的行為や意識は感じられず、よりよいクラスの雰囲気のなかで自らの居場所を確立している子どもの姿が分析できた。

友だちとの交友関係においても、思いやり意識が強く、関係がしっかりと築かれていることが確認できた。これは、小集団の特性を十分に生かした学校教育や、地域の人々の温かな人間関係が大きく影響していると考えられる。

冒頭でふれた「生きる力」について考察すると、神山町の伸び伸びとした雰囲気が子どもたちの豊かな人間性をはぐくんでいると考えられる。また、その背景には何よりも家庭や学校の強い教育力が存在することがうかがえた。さらに、学校と家庭の協力・連携に基づいた教育がなされ、神山町の地域性の特色がいかされた教育環境が整っており、結果として子ども自身が地域の教育力の恩恵を十分にうけているといえるであろう。

本研究では、自己意識と人間関係・行動との関連を考察したが、自己意識が学年の発達段階によって差が見られることから、それぞれの学年段階における自己意識と人間関係・行動とのかかわりを研究することを今後の課題とする。

最後に、この調査の実施にあたって、調査の対象としてご協力頂いた小学生の皆さん、また、調査準備の段階でご協力頂いた神山町の小学校の先生方や教育委員会の皆さんに、厚くお礼を申し上げたい。

（文責　斉藤・森田・鈴木）

参考文献

⑴　文部省　中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために」（1998）